

---

# 雨の降る日に逢いましょう。

境 鏡介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨の降る日に逢いましょう。

### 【Nコード】

N2243D

### 【作者名】

境 鏡介

### 【あらすじ】

ある雨の降る日に、あるモノを拾った事で少女はある事件に疑念を持ち始める。事故か。殺人か。自分の不快感を解消するために少女は動く。

## プロローグ：軍法審議

「では、君の報告を訊こうか。軍曹？」

低い男の声が『軍曹』に尋ねた。部屋の中は暗く、狭い。ただ男の煙草の火と煙が、目に鼻につく。

軍曹はパイプイスに座り直すと、抑揚の無い声で、「本日、自分が帰還途中でありました18時24分。当S地区モンブラン基地より西へ5本、南へ8本、西へ6本目の電柱の下にて『C』を発見しました。」

「『C』と電柱の距離は？」

「計測の結果、北北西の方角に9・4cmありました」

「なるほど。発見はたやすかつたわけだ」

男は煙をゆつくりと吐き出して、

「…次に、なぜ『C』を回収して帰還したのだね？」

軍曹は小さく咳払いをしてから、

「失礼しました。…帰還途中の天候は雨でした。現在も降り続けているかと思えます。発見した『C』は生後間もない様子で、大変弱っているようでした。長時間放置しておいたら生命の危険に関わると判断し、回収しました」

「優しい人間だな？クリスチーナ軍曹？」

「優しい人間かどうかは分かりませんが…」

そう言つて軍曹は言葉を切った。

「分からないが…、何かね？」

男が促した。

「…自分でも珍しいことをした。と、思います」

「…私もそう思うよ。軍曹」

男はそう言つて煙草を消した。匂いのみが残され、煙は闇の中に紛れた。

「…聞きたい事は以上だ。結果は少し待ってもらふことになるだ

ろつ。：そろそろ時間だ。恐らく」

男の言葉が終わりきらないうちに軍曹の後ろにあったドアが、控えめな音でノックされた。

軍曹は少し驚いた声で、「お見事」

「だろっ?」

男は得意そうに言って立ち上がった。

「急ぎなさい、軍曹。今夜はカレーだからな」

## 第1章：珍事と結論

「お父さんとしてはだな、智奈<sup>チナ</sup>。お前が心暖まる行動をしてうれしい反面、寂しくもあるわけだ」

そう言って栗栖平八郎<sup>クリス ハイハチロウ</sup> 先ほどの煙草の男 はカレーを食べる手を休め、娘 クリスチーナ軍曹 を見やった。

「…その心は？」

食事をやめずに、クリスチーナ軍曹こと栗栖智奈<sup>クリス チナ</sup>は『准将』に訊いた。

「つまりだな…」

栗栖はロマンズグレーの髪をかきながら、「捨てネコを拾って帰るってことは、小学生のときにして欲しかったのだよ」

「そうなの？」

「そうなの」

「へえ」

智奈は栗栖の言葉を軽く聞き流すと、「お母さん、おかわり」

と、言いながら栗栖麻紀<sup>クリス マキ</sup>に皿を差し出した。

「大盛りだね」

「食べ過ぎじゃない？」

麻紀は皿を受け取ると笑って、「太っても知らないわよ？」

「じゃ、太ったら教えるわ」

と、智奈は澄まして言って、水を口に運んだ。 「軍曹！上官の話の途中ではないか！」

栗栖はそう言ってから、「麻紀ちゃん。私もおかわり。大盛りだね」

皿を受け取ってキッチンに向かいながら麻紀は、「…もっと作っておいた方がよかったかしら？知亜乃<sup>チアノ</sup>の分が無くなっちゃう」

「お父さん。食事の時には『軍隊ごっこ』はしないって、『軍法』に決めなかった？」

「娘よ。『ごっこ』ではなく、『模擬軍隊』といいなさい」

「Yes, sir」

と、智奈はスプーンをくわえながら敬礼した。『模擬軍隊』の時には戦場の最前線にある『モンブラン基地』も、平時には住宅街にあるありふれた一戸建てにすぎない。したがって、階段の下にある『取調室』は『物を置けない物置』になり、『食堂』は『ダイニングキッチン』となる。全ては家長である栗栖が、子どもの時に見たアニメの影響を未だに受けているために行われている、遊びなのである。

さて、この日クリスチーナ軍曹 もちろん栗栖が名付けた が審議にかけられる理由となったのが、ダイニングの隣のリビングにあるソファアーの上、毛布にくるまっている黒い子ネコである。

「とにかくだ」

栗栖はスプーンの先を智奈に向けて、「飼うのは駄目だ」

「なんで？」

明るい茶色の髪をかき揚げて智奈は訊いた。

「私、拾ってきたの初めてよ？お父さん。それに小学生じゃあるまいし世話をサボるわけじゃないじゃない？」

「そうね」

麻紀が栗栖のスプーンを取り上げながら言った。

「智奈なら毎日『正確な』時間に世話をするわよ。心配ないんじゃない？」

「計画表作るわ」

「お前ならな」

栗栖は深いため息をついて、「そもそも、なんで飼いたいんだ？お前を16年間見守ってきたが今回が初めてだからな」

「お父さん、あのネコよく見た？」

「黒いネコだろう？」

「黒いネコなの」

「真っ黒なのよ。全身ね」

麻紀が皿を片づけながら言った。「本当に『黒ネコ』なのよ。もう気持ちいいくらいに。ね？智奈」

「完璧よ」

「理由はそれだけ？」

「それだけ」

「駄目だ」

栗栖は断乎とした口調で言い切った。

「捨ててきなさい」

「イヤ」

智奈は父を睨みながら、「死んじゃうわよ。絶対にイヤ」

「駄目だ」

栗栖は手を組み合わせて、肘をテーブルについた。

「軍曹、これが最終勧告だ。『C』を『正確に』『元の位置に』戻しなさい」

「…家から西へ5本、南へ8本、西へ6本目の電柱の下、北北西の方角に9・4cmに？」

「…そうだ。『正確に』な。…まさか、出来ないわけではあるまい？」

智奈は苛立たしそうに髪をかきながら立ち上がった。

「…了解。でも、今夜はいいでしょ？明日、捨ててくるわ。…もちろん『正確に』、ね」

智奈はそう言って2階の自分の部屋へ向かった。栗栖は智奈が座っていた椅子を見ながら、

「…麻紀ちゃん。私、嫌われたかな？」

と、妻に恐る恐る訊いたのだった…。

しかし、この日の翌日に黒い子ネコは『正確に』元の位置に戻ることはできなかった。なぜなら、栗栖家から西へ5本、南へ8本、西へ6本目の電柱の下、北北西の方角に先客がいたからである。その先客は、雨が止んだあとにそこに着いたにも関わらず、冷たく、冷めきっていた。もしも、智奈が拾わなかったら黒い子ネコもそうなっていたであろう。

その『人物』は、物言わずに、ただ、ただ、冷たく、冷めきっていたのである。



## 第2章：不快感と計測

黒い子ネコを拾った日から3日後。智奈は子ネコと共に例の電柱に来ていた。日が沈みかけていることもあり、家々からは夕食の香りが漂い、人々は家路につき、智奈のセーラー服は夕暮れの色に染められ、黒い子ネコは、黒いままであった。

「あなたの場所、盗られちゃったわね」

智奈は電柱の下に供えられている夕焼け色の花を見ながら言った。智奈の腕の中では、子ネコが微動だにせず、目を閉じている。

「死人がいた場所には捨てたくない」と、智奈が栗栖を説き伏せて、黒い子ネコは栗栖家で飼うことになった。しかし、未だに名前は見つけられていない。

「元々、あなたを捨てるつもりはそんなに無かったけど、いざ場所が無くなると」

そう言うとき智奈は目を細め、「……頭にくるわね。不思議」

智奈が子ネコを拾った日から次の日にかけての深夜に、死体がこの場所で見つかった。智奈が見たニュースによると、亡くなったのはこの近所に住んでいた一人暮らしの大学生。頭部から出血していた点と、雨上がりで滑りやすくなっていた現場の状況から、警察では『事故』であると判断した。警察の早い判断には理由があった。大学生の体内から大量のアルコールが検出されたのである。つまり、彼は酔っ払っていたのだ。

「死人を悪く言うのは気が引けるけど、酔っ払いのせいで『正確な』場所に戻せないのは頭にくるわ」

智奈が子ネコの背中を撫でると子ネコは気持ちよさそうに喉をならした。その音と振動を、耳と肌で感じながら、「……捨てなくてよくなったけど、なんとなくイライラする。分からない？この気持ち

？」

と、子ネコに問いかけた。

電柱についている街灯が灯った。夕焼け色の花々が本来の色にもどり、電柱は無機質な色を取り戻し、智奈の不機嫌そうな表情が映し出された。智奈は電柱を見やると、電柱のつなぎ目や表面上の気泡の後に、『黒いもの』がある事に気づいた。その『黒いもの』は1ヶ所に集中していた。

『黒いもの』が特に多く見られる点を見つめて、智奈は眉間にシワを寄せた。

「…血痕、か。拭き取りきれなかったのね」

自分の目線の少し上に集中している血痕を、智奈はしばらく見つめていたが、突然に抱いていた子ネコを地面に降ろしたて、持っていた鞆の中をあさはじめた。智奈は測量用のメジャーを取り出すと、おもむろに電柱を測りだした。子ネコは不思議そうに、その様子を眺めていた。

「…155cm。±3cmつてどこか」

巻き尺の長さを留めていたロックを外すとスチールテープが、内蔵のバネにより急速に巻き取られた。巻き取り終わる衝撃が、智奈の手に伝わる。

智奈は、ポニーテールにしている髪の手先を片手でいじりながら、メジャーを鞆の中に戻した。智奈がしゃがむと子ネコが寄ってきて、体を智奈の脚にこすりつけてきた。智奈は子ネコの背中をゆっくりと撫でてやりながら、カバンから携帯電話を取り出して電話をかけた。数回の呼び出し音の後に、相手につながった。

「…もしもし。仕事中？…分かった。でも、すぐ終わるから聞いてくれる？…少し、調べて欲しいことがあるの」

### 第3章：違和感と皮

「…新たな若き戦力を確保することができたのは幸運であった。しかし、君も軍に入ったからには軍の規律を乱す事をしてはならない。上官の命令は絶対だ。よいか？」

栗栖平八郎准将は、基地に配属されたばかりの新兵に向かって激をとばした。

「臆することなく戦え！祖国の為に！家族の為に！そうする事によつて我々は！真の自由を！名誉を！得るのだっ！」

興奮してソファから立ち上がり、准将は更に声を張り上げた。

「倒れていった者達の為にも、我々は奴らに思い知らせなければならぬ！我々の理想を踏みにじってきた報いを！そして…」

栗栖はここで言葉を切り、拳を突き上げ、「正しいのは我々だと言うことをっ！」

「ウミヤ」

まだ幼い新兵には准将の演説は理解出来なかったが、元から大きい目を更に見開いて准将を見上げた。

「絶対調じゃない、お父さん」

ダイニングからリビングの様子を見ながら智奈は呟いた。

「今まで男1人だったからね。嬉しいんじゃない？」

と、智奈の向かいあつて座っている女性は言った。

「男がはいって」

「オスじゃない？」

「いいじゃない。そんな細かいこと」

と言つて、女性は長い脚を組み直した。

この女性が智奈の姉であり、警視庁交通課に所属している栗栖知<sup>クリス</sup>亜<sup>チアノ</sup>乃である。

「それで、何が知りたいだっけ？」

そう言って、知亜乃はビールの缶を口元に運んだ。

「死んだ大学生の、身長」

と、智奈はアーモンドをつまみながら言った。

「物好きよね。何でそんな事知リたがるのか分らない」

知亜乃は椅子にかけてあった上着から手帳を取り出し、右手を智奈に差し出した。

「バイト料は？」

「社会人が学生からお金取るの？」

知亜乃は悪戯っぽく笑って、「社会人だからこそ、自分の働きに対する正当な報酬が分かるの」

智奈はポニーテイルをいじりながら、「…まず、そっちから。料金は後で」

と、言った。

知亜乃は頬をふくらませて、「踏み倒したら逮捕するから」

「罪状は？」

「そうね…。『上官に対する反逆罪』ってとこかな？軍曹」

そう言って、クリスチアーノ大佐は楽しそうに微笑んだ。

「まあ、身長だけなんて教えてくれなかったから、他にもいろいろ聞いてきたわよ」

と、『事故』のあった地区を担当していた刑事から、情報を仕入れてきた知亜乃は言った。

「よく教えてくれたわね？」

と、智奈は訊いた。

「後で、お・しょ・く・じ・に、付き合えばいいの」

「ようするに、お酒が飲めるわけね」

と、智奈は頬杖をついて、「無料で」

「失礼ね。あんたの為にお姉様は頑張ったのよ？」

知亜乃は抗議してから、手帳に視線を落とした。

「えっと…。死んだのは大宮佑介。オオミヤ ユウスケ21歳。隣の駅の前にあるK大学の2年。成績は悪かったらしいわよ」

「身長は？」

と、智奈は訊いた。

「死んだのは9月20日の午後11時から21日の午前0時の間ね。飲み会の後だったこともあって、酷く酔っぱらっていた、と」

「身長は？」

と、智奈は訊いた。

「死因は左前頭部を強打したことによる、外傷性ショック死」

「だから、身長は？」

と、智奈は訊いた。

「雨が揚がったのが20日の午後10時頃。現場も雨の後で足元が滑りやすくなった。電柱の下にバナナの皮があったことから、担当者は、酒と足元の滑りやすさ、そしてバナナの皮を踏んだことにより、酔っ払いは足を滑らせて頭を打ち、死亡してしまった。と、判断した」

「バナナの皮？」

「酔っ払い君の身長は4月の時点で、173・1cmだったさ。」

…私とあんまり変わらないわね」

「お姉ちゃんの方が2・8cm低いわ」

と、智奈は訂正してから、「バナナの皮があったの？」

「らしいよ。踏んだ跡もあつたってさ」

と、言つて知亜乃はビールを飲み干した。

「バナナがどうかしたの？」

と、麻紀が風呂上がり髪の毛を拭きながらダイニングに入ってきた。

「智奈。私にもビール」

と、麻紀は最後のアーモンドをつまみながら言った。

「お母さん、バナナの皮つてすべる？」

と、智奈は冷蔵庫を開けながら訊いた。

「すべるわよ。踏んだことあるけど、本当によくすべるわ」

「踏んだことあるんだ」

と、知亜乃は笑って、「さすが、お母さん」

「誉め言葉として、受け取っておくわね」

と言いながら、麻紀は智奈から缶を受け取って、プルトップを開けた。

しばらく、智奈はポニーテイルをいじりながら眉間にシワを寄せていた。

「どうした、妹よ。普段から悪い目つきが、更に悪くなっているぞ」

と、3本目のビールの缶を開けながら知亜乃が言った。

「智奈は綺麗な顔してるのにね。目つきが恐いのよ。もっと笑顔になりなさい」

と、4本目のビールを飲み干して、麻紀は言った。

「ちよっとお母さん。智奈『は』って何？智奈『は』って」

「知亜乃はね、可愛い顔してるの。…自分で分かってるでしょ？」

「まあね」

智奈は2人の酒豪の話を聞き流していたが、やがて、「…少し、高いわね」

と、呟いた。

「高い？何が？」

と、知亜乃がビーフジャーキーをかじりながら訊いた。

「…足を滑らせた場所にもよるけど、誤差を入れても、あと2cm低くないとしっくりこないわ」

「それ、何の話？」

麻紀が新しい缶に手を伸ばしながら言った。

智奈は麻紀の取ろうとした缶を奪いにとって、プルトップを開け、1口飲んだ。

「未成年がお酒飲んだ！」

麻紀は知亜乃と目を合わせ、「逮捕しちゃう?」

「見逃しちゃう」

と、知亜乃は悪戯っぽく笑って言った。

「…気に入らないわね」

と、智奈は独り呟いた。

「智奈、さつきから高さが変だ、とか言ってるけど、もしかして酔っ払いが頭を打った高さのこと?」

と、知亜乃は訊いた。「そう」

「…まさか、あんた測ったの?」

「そう」

知亜乃は信じられない、といったように首を振って、「もしかして、まだメジャーとか持ち歩いてるの?」

「もちろん、竹製の30cm定規も持って歩いてるわよ。この子」

と、麻紀は恨めしそうに智奈の缶を見ながら言った。

「急にマンホールの直径が知りなくなったりしたときに必要じゃない?」

と、智奈は澄まして言った。

「そんなとき、無いんじゃない?」

知亜乃は呆れたように言った。

「あげる。美味しくない」

と、言って智奈は缶を麻紀に渡すと、知亜乃に向かって、「お姉ちゃん。死んだ大学生と一緒に飲んでた連中の住所とか分かる? 大體調べてあるんでしょ?」

「知ってどうするの?」

と、知亜乃は訊いた。

智奈は少し考えてから、「調べるなら徹底的に、ね。そうしないと、気が収まらないの」

ダイニングで女性3人が酒盛りをしている間、リビングで子ネコ

とテレビを見ていた栗栖は、子ネコの背中を撫でながら、語りかけた。

「…君にも分かるかね？この、疎外感が」



## 第4章：調査と記録

9月24日、土曜日。時報で腕時計の時間を合わせて午後1時ぴったりに家を出ると、智奈は例の電柱に向かった。少し涼しい日であつたので、ジーンズにスニーカー、白いVネックの長袖のTシャツにミリタリー風のブルゾン、といったいでたちであつた。

電柱に着くと、智奈はブルゾンのポケットからストップウォッチを取り出した。

「…この地点から、駅前の居酒屋『夜桜』までの所要時間を計測。速度は『酔っぱらった栗栖知亜乃の歩く速度』を参考とする」

と、智奈は独り言を言つて、ボタンを押した。

「計測開始」

智奈が昨夜、知亜乃から仕入れた残りの情報によると、死亡した大宮佑介とその友人3人は、居酒屋『夜桜』を20日の午後11時6分に出ると、そのまま寄り道すること無く各自帰宅した、とのことだつた。

4人の内、1人は残りの3人と逆方向の為にタクシーで帰宅。大宮を含めた残りの3人は徒歩で帰宅した。

そして、死亡推定時刻の間に死亡者以外の3人は帰宅していたことも、警察は調べていた。

「…19分43秒26。およそ19分43秒。したがって、大宮佑介の死亡推定時刻は午後11時25分43秒頃であると思われる。誤差は±3分間」

準備中の札の掛かった『夜桜』の店先でストップウォッチを止めると、智奈は結果を口に出しながらメモをとった。

メモをとり終わると、手帳をポケットに突っ込み、「この地点からの中川隆ナカガワ タカシの現在住んでいるアパートまでの所要時間を計測。速度は変わらず。…計測開始」

中川隆は死亡した大宮佑介と同じ大学に通っている、現在2年生。中川と大宮は高校時代からの友人との事であった。『事故』の起こった夜、中川は大宮達と一緒に徒歩で帰宅、途中で高橋悠人タカハシ ユウトと別れたと証言した。そのことは高橋も証言している。

「…27分03秒41。およそ27分03秒。誤差は±2分間」  
古いアパートを前にして、智奈はストップウォッチを止めた。錆びた階段を上がり、中川の住んでいる202号室に向かった。

智奈はポニーテイルをいじりながらドアを睨みつけていたが、突然ドアに耳を当てると、瞳を閉じた。

しばらくの間そうしていたが、耳を離すと、隣の201号室の回っている換気扇を見ながら、ドアを乱暴に叩き、「ちよつと！いるんでしょ！出てきなさいよ！」

と、大声を出した。

「絶対、逃がさないから！責任とりなさいよね！この、人でなしっ！」

言い終わると、再びドアに耳を当てた。物音がしないことを確認すると202号室を離れ、今度は201号室のドアをノックした。

「すいません、お聞きしたいことがあるのですが」

少しの間を置いて、ドアが細く開かれた。ドアチェーンをかけた

ままで、201号室の無精ひげを生やした青年は疑わしように、「何の用ですか？」

「申し訳ありません。お訪ねしたいことがあります……」

智奈はそう言って頭を下げてから、「隣の202号の男なんです  
が、今月の20日に何時くらいに帰ってきたか、ご存知でしょうか？」

青年は智奈を見ながら、照れたように頭をかいて、「20日ですか？覚えてないですよ」

「お願いします！思い出して下さい！」

智奈が懇願の表情をつくって男を見つめると、男は目を智奈から逸らして、さらに頭をかいた。

「ええっと……、20日だから火曜ですね、今週の。確かあの日は……」

「あの日は？」

「えっと、確か、夜中の12時少し前に隣の人が帰ってきたと思いますよ」

「12時少し前に？」

「多分それくらいだと思いますよ」

青年はそう言ってから、少し恥ずかしそうに、「……このアパート古いから、誰かが階段使うと音が聞こえるんですよ。この部屋、すぐ横が階段だから」

「なるほど」

「部屋の間の壁も薄いから、隣の音も聞こえやすいんです。階段上がった音が聞こえてから、隣の部屋のドアが閉まった音が聞こえましたよ。少ししてから、シャワー浴びてる音も聞こえてきましたから間違いないんじゃないかな」

「そんな音も聞こえるんですか」

「家賃がその分安いですから。仕方ないですよ」

智奈は頭を下げて、「どうもありがとうございました。思い出して下さって」

男は頭をかきながら、「好きなドラマをやった日だったんで、  
たまたま覚えてただけですよ。大したことじゃありません」

智奈は男にもう一度礼を言って階段をおりた。智奈は深いため  
息をついてから伸びをすると、来た道を 酔っていない人間の速度  
で 戻っていった。

『夜桜』に着くと、智奈はストップウォッチのボタンを押した。

「大宮佑介と中川隆が、高橋悠人と別れたとされている自販機か  
らの計測の結果、『夜桜』までの所要時間は4分22秒83。およ  
そ4分23秒。±3分間」

智奈がメモをとっていると、目の前の引き戸が開いてヒゲを生や  
した体格のいい男が顔を出した。

「何だ、智奈ちゃんか！誰かいるなあ、と思ってたんだよ」

大男は野太い声で智奈に語りかけた。

「最近、来てくれないから寂しかったよ。知亜乃ちゃんも元気？」

「はい。今日も元気に二日酔いです」

『夜桜』の店主は豪快に笑って、「なるほど！相変わらずだねえ、  
智奈ちゃんも知亜乃ちゃんも」

智奈は、ふと思い出したように、「マスター、訊きたいことがあ  
るんですけど」

「何だい？」

「この間、大学生が足滑らせて亡くなりましたよね？その大学生  
のグループ、ここで飲んでたんでしょ？」

「ああ、あの学生さんね」

『夜桜』のマスターは急に悲しそうな顔になり、「ウチで飲んだ  
後に亡くなっただろう？そりゃあ飲むのは自由だけどね、何だか、  
申し訳なくてさ」

「マスターのせいじゃないですよ。高校生じゃあるまいし、調子づいて飲みすぎたからいけないんです」

「手厳しいね？」

「そうですね？」

そう答えながら智奈は手帳を開いて、「えっと、あの晩、亡くなった大学生と飲んでた人が、一度ここに帰ってきたって本当ですか？」

「ああ、そうだよ。携帯を忘れてね。連中、奥の座敷の方で飲んでさ。バイトの娘が連中が帰った後で片付けてる時に、座布団の下にあるのを見つけたんだよ」

「何時くらいに取りに来たか覚えてますか？」

マスターは顎髭を撫でながら、低く唸って、「…俺は、厨房でつまみとか作ってたから正確には分からないけど、バイトの娘に休憩時間を知らせにいったときにはいたから…。大体11時半くらいにはいたんじゃないかな」

「なるほど。±2分間くらいですね」

智奈はメモをとりながら、「その時、走った後みたいな感じありましたか？息があがったり、汗をかいてたり…」

「…俺が見た感じだとそんな感じはなかったな。普通のほろ酔いの学生だったよ」

智奈はメモをとり終わると、手帳をポケットに戻した。

「しかし、どうしてそんなこと訊くんだい？」

と、マスターは不思議そうに訊いた。

「理由ですか？今度授業で、『過度の飲酒が人体に及ぼす影響』と『大学生が好むカクテル、ベスト50！』っていうのを発表するんです。これはその調査」

智奈はマスターに軽く頭を下げて、「じゃあ、そろそろ失礼します。今度は営業中に来ますね」

「うん。待ってるよ」

智奈は、マスターに背を向けると、「『夜桜』から高橋悠人の現

在住んでいるアパートまでの所要時間を計測。速度は変わらず。  
計測開始」

『夜桜』のマスターは智奈がおかしな歩き方で去っていくのを見  
送りながら、「…もしかして、智奈ちゃんも二日酔いだっただのかな  
？授業で『大学生が好むカクテル、ベスト50！』はやらないだろ  
うしなあ…」

と、呟いた…。

## 第5章：報告と検証

午後4時17分、『“B” TRAIN』（ビー・トレイン）という名の喫茶店の窓際の席に、智奈は座っていた。小さく『ムーン・リヴァー』がかかっている店内には、智奈の他に客はいなかった。智奈が『“B” TRAIN』と店名が書かれた紙ナプキンの長さを測っていると、新しい客が入ってきた。その客は智奈の座っているテーブルに近づくと、「ご一緒していいかしら？」

「どうぞ」

智奈は顔を上げずに答えてから、「もう大丈夫なの？今朝は調子悪かったじゃない？」

「…まだ本調子じゃないけどね。久しぶりのお休みだし…」

知亜乃は椅子に座りながらカウンターの方を向いて、「マスター。エスプレッソ」

「…たまにはエスプレッソ以外も飲んでくれないかい？知亜乃ちゃん」

と、『“B” TRAIN』のマスターは眼鏡を拭きながら、ため息混じりに言った。

「そのセリフ、智奈にも言ってくれない？オレンジジュース以外も飲め、って」

知亜乃は注文を終えると、耳をすませて、「『ムーン・リヴァー』か…。いい曲ね」

と、呟いた。

「お姉ちゃん。『夜桜』のマスター、寂しがってたよ。最近、来てくれないって」

と、智奈は窓の外を定規で差して言った。曇り空の下、通りの向こうに『夜桜』の、桜の花びらの形を模した看板が見えた。

「へえ。『夜桜』行っただ？迎え酒？」

智奈はポケットからストップウォッチを取り出して、「帰宅時間

の計測、よ。あの夜の」

知亜乃は大げさにため息をつく、ショートカットの髪をかきあげながら、舞台役者のような口調で、「おお、妹よ。どうして君は、そんなことを調べるのかね？」

智奈は片手を胸元に当てて、「お姉さま。それは言ったはずですよ。やるのでしたら徹底的と」

「……まあ、あなたの性格はよく分かってるけどね。あんまり変なことに首突っ込まないほうがいいわよ。面倒くさいからさ」

マスターが知亜乃の前にコーヒークップを静かに置くと、無言でカウンターに戻っていった。

知亜乃はカップを口元に運びながら、「まあ、計測の結果くらいは聞いてあげるわよ」

智奈は紙ナプキンの計測をやめて、ポケットから手帳を取り出した。

「……計測結果。あの電柱から『夜桜』までの所要時間はおよそ19分43秒。したがって、大宮佑介の死亡推定時刻は午後11時25分43秒頃。誤差は±3分間」

知亜乃はメニューを見ながら、「なるほどね」

「『夜桜』から中川隆のアパートまでの所要時間はおよそ27分03秒。誤差は±2分間。同じく、高橋悠人のアパートまでは、およそ13分16秒。誤差は±2分間」

「その2人つて、歩いて帰った2人？」

と、メニューから顔を上げて知亜乃が訊いた。「そう。タクシ

ーで帰ったのは小柴新太郎コシバシンタロウね。『夜桜』からはタクシーで、およそ8分32秒。誤差は±4分つてとこね」

「タクシー使ったの？」

「使ったの。そうしないと正確じゃないから」

知亜乃の呆れ顔を見ずに、智奈は手帳を読みつづけた。

「小柴の実家ってお金持ちね。オートロックのマンションだったし。1人だけタクシー、っていうのも分かるわ。本人も頭の悪そう



なお坊っちゃんだったし」

「へえ、会ったんだ。よく会えたね」

メニューを戻しながら、知亜乃は言った。

「偶然、部屋にいたから。死んだ大宮佑介の妹です、って言ったの。色々喋ったわよ」

「よくそんな嘘がつけるわね？」

「お姉ちゃんに言われたくないわ」

智奈は姉をチラッと見て、「そもそも、嘘のつき方を教えてくれたのはお姉ちゃんじゃない」

「そうだった？」

「そうよ。『簡単にできる早退の方法』。教えてくれたじゃない？」

知亜乃は額に手をあてて、「…ああ、教えた気がする」

「まあ、小柴が他の2人みたいに、大宮と高校の時から友達だったら無理だったわね」

「そうかもね。それで、どんなこと教えてくれたの？」

智奈はジュースを飲んでから、「…小柴以外の3人は高校から、予備校、大学まで同じところに通っていたから、仲は良かった。高校の時から何をするにも いいことも悪いことも 一緒だったらしい。自分は時々、疎外感を感じた。あの夜は、すぐにタクシーに乗ったから、よく分からない。だってさ。後は、つまらない話ばかり」

「結局、よく分からないってこと？無駄足だったんじゃない？」

と、言って、知亜乃は脚を組み直して、左手で頼杖をついた。

「話を整理すると。智奈の計測だと、大宮が死んだのは午後11時25分頃。間違いない？」

と、知亜乃は右手の人差し指をクルクルと回しながら、智奈に訊いた。

「私の計算だとね」

「それで、昨日私が仕入れた情報では、中川隆は午後11時半頃

に『夜桜』に携帯を取りにいったついでに、バイトの女の子をナンパしていた。高橋悠人は午後11時20分くらいに帰宅して、その後はDVDで映画を見ていた。部屋の明かりがつくのを近所の人間が見ていたから、部屋にはいたはず、と」

「お姉ちゃんの情報だとね」

と、智奈は相づちを打った。

「小柴新太郎はタクシーで午後11時半の少し前に帰宅している。そのことは、タクシーの運転手も証言していて疑う余地はない、と」

「酔ってない人の証言だしね」

「結論」

知亜乃是指を回すのを止めて、コーヒーカップを口に運んだ。エスプレッソを一口飲んでから、「無理ね。事故よ」

「…そうね」

智奈は定規でグラスの高さを計りながら、「タクシー使っても間に合わない。もし使えたとしても、タクシーだと顔を覚えられるかもしれないし」

「あんだ、時間測ったときに、道に迷ったりした？」

と、知亜乃が智奈に訊いた。

「迷ってないよ。今日、午前中に自転車ですべてまわっておいたから」

「じゃあ、確定ね。酔っ払いがバナナの皮を踏んで、足を滑らせた。頭を打った。そして」

知亜乃は言葉を切ると、カップをソーサーに戻し、智奈の目を正面から見据えた。

「死んだ。それでいいじゃない」

## 第6章：雨と結末

雨が降ってきた。雨粒が窓ガラスを打ち、地面に弾かれる音が店の内にも届いていた。

傘を開いて歩く者。あるいは屋根の下に走る者。智奈はポニーテイルをいじりながら、その外の様子を眺めていた。

「…やっぱり降ってきたか」

と、マスターが智奈達のテーブルに近づいて言った。

「…マスター。傘持ってたから、貸してくれる？」

と、知亜乃がマスターに頼んだ。

「いいけど、ちゃんと返してね。知亜乃ちゃん。いつも返してくれないから」

「ごめんね。傘って雨が降ってないと、持ってくるの忘れちゃうの」

と、知亜乃は笑いながら言った。

マスターは困った様な頬を掻きながら、「…まあ、気持ちとは分かるけど。ウチも、お客さんが傘を忘れていたり、傘を取り違えたりするのはしょっちゅうだからね」

「そうでしょ？誰でもそうなの。毎日持ち歩く物じゃないから。仕方ないわよ」

と、知亜乃は頷きながら言った。

「開き直りかい？」

「でも、正論じゃない？」

突然、智奈がポニーテイルをいじる手を止め、眉間にシワを寄せた。

「…智奈？いつも以上に目つきを悪くして、どうしたの？」

智奈は姉の問いかけに応えずに、テーブルの上の手帳を開き、シヤープペンシルで何かを書き込みはじめた。

知亜乃とマスターは黙って、その様子を見ていた。

智奈は書く手を止めると、「…可能ね。これなら。なんてくだらない…」

と、呟いた。

知亜乃は不思議そうな顔をして、「智奈？」

「お姉ちゃん。あの3人に、警察が大宮佑介が死んだのを知らせたのはいつだったの？」

「え？えつと…」

と、知亜乃は右手の人差し指を回しながら、「…確か、21日の夕方だったかな？多分、取り調べのついでに教えたんじゃないかな？その前に、遺族が電話くらいかけたかもしれないけど」

智奈は手帳を閉じて、「…平日の夕方。なるほど」

「何が「なるほど」よ。1人で盛り上がって。どうしたのさ、急に」

と、知亜乃はすねた様に頬を膨らませて、「ずるいじゃない。私にも教えなさいよ」

智奈は、定規をつかんで立ち上がると、「…後でね。お姉ちゃんの先に、教える人がいるの」

「教える人？」

と、知亜乃が首を傾げて言った。

「そう。私の家から西へ5本、南へ8本、西へ6本目の電柱の下、北北西の方角に9・4cm。その位置を私から奪った人よ」

智奈がそのアパートに着くと、タイミングよく智奈が用のある人物が部屋から出てきた。その人物は、傘を開いて雨の中に入ると、智奈の姿に気がついた様子だった。

智奈はその人物にゆっくりと近づき、微笑みながら、「こんにちは。いいお天気ですね？」

語りかけられた人物は戸惑いを隠しきれない様子で、「いや、いい天気ではないと思いますけど……」

智奈は目の前の人物を見上げて、「高橋悠人さんですね？」

高橋は怪訝そうな顔をして、「そうだけど、何か用？ 急いでるんだけど」

「そうですか。では手短に」

智奈はそう言うってから、突然無表情になり、「あなたでしょ？ 大宮佑介を殺したのは」

高橋の目が大きく見開かれ、「何を言ってるんだ？ 君は……。佑介は事故で」

「事故に見せかけた殺人」

智奈は高橋の言葉を遮ると、「しかも、これは計画的な殺人。突発的な手口ではないから。言葉を変えれば、突発的な手口は不可能なのよ。なぜなら、この手口は1人ではできないから。あなたと中川隆が共犯ね。そうでしょ？」

高橋は何も言わずに、智奈を見つめていた。傘の柄を握る手が、力を入れすぎて白くなっている。智奈は高橋の目を見据えて、言葉を続けた。

「あの夜あなた達は、大宮と小柴を酔いつぶした。もちろん、自分達は飲み過ぎないようにしてね。『夜桜』を出ると、小柴をタクシーに乗せて計画を実行した」

2人の息が、白く染まって吐き出され、雨に混じった。智奈はジーンズのポケットに右手を入れて、「その計画は単純。ただ、あなたが中川隆のアパートに泊まり、中川があなたのアパートに泊まるだけ。このアパートから『夜桜』まではおよそ13分16秒。往復したら26分32秒。誤差を入れて計算すれば、中川が午後11時半頃に『夜桜』に着くことは可能なのよ。あなたは、大宮を電柱にぶつけてから中川のアパートに行った。午後12時の前には着けるわね」

「いいかげんにしろ！」

高橋は突然、大声を出して、「何を言ってるんだ、さつきから！俺が隆の部屋に泊まった？俺が佑介を殺した？馬鹿げてる！俺は隆のアパートに泊まったことは無いし、どこにあるかも知らない！第一、佑介を殺す理由も証拠も無い！」

智奈は、高橋の白い息を見つめながら、「理由なんて知らないわよ。他人のもめ事に興味はないの。でも、証拠はあるわよ。さつき言ったやり方ならね」

「何？」

「あなた、大宮を殺した後で、中川のアパートでシャワー浴びたでしょ？」

智奈は高橋の顔に視線を戻し、「シャワーを浴びて、髪の毛が一本も抜けない人っているのかしら？」

高橋の顔が血の気が引いた様に白くなり、唇が震え始めた。

「それに、あなたは中川のアパートがどこにあるのかも知らないんでしょ？もし、中川のアパートからあなたの髪の毛が見つかったら……」

突然、高橋が自分の傘を放り投げ、智奈の首を締めたことで、智奈の言葉が途切れた。智奈は自分の傘を落とし、高橋の手を掴んだ。高橋の太い指が、智奈の細い首にゆつくりとめり込んでいく。智奈はポケットに入れたままだった右手を出し、その手でジーンズの尻のポケットからはみ出ていた定規を引き抜くと、手が白くなるほどに握りしめて、高橋のこめかみに突き立てた。

驚いた高橋の指から力が抜けると、智奈は高橋の指を振りほどき、右足で高橋の股関節を蹴り上げた。

高橋はうめき声をあげながら、股関節を抑えてしゃがみ込んだ。

智奈は首をさすりながら、深呼吸をして呼吸を整えた。

雨に濡れて額に貼りついた前髪をかきあげると、左のこめかみから血を流しながらうめいている高橋に向かって、「……アルミ製の定規でも、人間の眼球くらい潰せるのよ。こめかみと股関節だけで済んだんだから感謝しなさい」

雨にうたれたまま、智奈はうめている高橋を見下ろして、「選んだ電柱が悪かったのよ」

「…いま、警察呼んだから」

智奈が声のした方を振り返ると、知亜乃が大きな傘をさして立っていた。知亜乃は妹に近づきながら、「そいつが犯人？」

智奈は姉を見つめて、「正確には片割れ。どうして、ここが分かったの？」

知亜乃はジャケットの内ポケットから智奈の手帳を取り出して、「忘れていったでしょ？」

知亜乃は、妹を傘入れてやりながら、「…智奈。あんた、すっごくかっこいいわよ」

智奈は、定規を握りしめている右手を見つめながら、「…ありがとう」

知亜乃は、智奈の手から定規をゆったりと引き抜くと、雨に濡れた妹の身体を抱きしめた。

「…2階級特進ものの功績ね。上に進言してあげようか、クリスチーナ軍曹？」

智奈は姉の抱擁に身を任せながら、「…結構です、大佐。階級上がっても、お小遣いの金額は変わらないし」

## エピソード

「高校の時に、大宮達のクラスメートが亡くなったんだって。いじめが原因の自殺だと思われたんだけど、本当は大宮達3人が殺したんだって」

知亜乃の言葉を聞いて、智奈は驚いた様に、「殺した？」

「廃ビルの屋上で。手すりを越えさせて、背中を小突いたりしてからかってたんだって。そうしたら、本当に突き落としちゃって。そのまま……」

「そう……」

と、言って智奈はオレンジジュースを飲んだ。

高橋悠人と中川隆が逮捕されてから3日後の夕方、『“B”TRAIN』に智奈と知亜乃はいた。また偶然にも『ムーン・リヴァー』がかかると店内には、智奈達の他に2、3組の客がいた。智奈のひざの上では、子ネコが丸くなっている。

「それで、高橋悠人がその事を警察に言おうとしていたらしいわ。罪の意識ってヤツかしらね？」

「それで、口封じの為に殺した？単純ね」

「まあ、高橋と中川からしたら、5、6年前のことを掘り返されるのは嫌だったんでしょね。自殺ってことで片づいてたし」

智奈は、子ネコを撫でながら、「……勝手ね」

知亜乃は脚を組み直して、「人間の物事の理由ってものはね、智奈。単純で、勝手なものなのよ。他人から見れば不可解なことでもね」

「それ、どこからの引用？」

「失礼ね。自作よ」

と、言って知亜乃は頬を膨らませた。

「お待たせ」

マスターは知亜乃の前にカップを置くと、黒い子ネコに目を止め



た。

「黒いねえ。何て名前？」

と、マスターは智奈に訊いた。

「まだ決まってるないんです」

と、智奈が答えた。

「いまのところは『名も無き2等兵』」

と、知亜乃が言った。

「名前が無いネコか……。なかなか面白い偶然だね」

そう言っ、マスターは楽しそうに笑った。

知亜乃が不思議そうな顔をして首を傾げた。

「何？面白い偶然って」

マスターは、子ネコの背中を撫でながら、「いまかかっている『ムーン・リヴァー』。この曲は、オードリー・ヘップバーンが主演した映画に使われていたんだ」

「ああ、そうだったわね。見たことはないけど」

と、知亜乃が言った。

「私も」

と、智奈も言った。

「そうなんだ？それは残念だな」

と、マスターは丸い眼鏡を押し上げて、「まあ、とにかくだ。その映画でオードリーは猫を飼ってるんだ。でもね、その猫は名前がないんだよ」

「へえ」

と、知亜乃は楽しそうに、「それは偶然ね」

「でも、私は名前はつけた方がいいと思うよ。呼びにくいしね」  
マスターはそう言っ、カウンターの中に戻っていった。

「まあ、確かに名前はあった方がいいわね。『名も無き2等兵』じゃ長すぎるし」

知亜乃の言葉に頷いて、智奈はポニーテイルをいじりだした。

智奈は、子ネコを見つめて、「シュバルツバルト」

「長いって」

「じゃあ、クロ」

「面白味がない」

「じゃあ、墨汁」

「あんた、真面目に考えてる？」

と、知亜乃は呆れ顔で、「別に『黒』にこだわらなくてもいいじゃない。たまには意表を突きなさいよ」

「意表…」

智奈はポニーテイルをいじる手を止めて、「…じゃあ、豆腐」

知亜乃は腕組みをして、「…智奈にしては上出来ね。『ミルク』

とか『シュガー』とかじゃなくて豆腐か。でも、ストレートすぎない？」

智奈は再びポニーテイルをいじりながら、「じゃあ、少し変えて…。トーフアは？」

「…豆腐よりは素敵ね。いいんじゃない？」

と言って、知亜乃は微笑みながら、「じゃあ、今日からトーフア2等兵だ」

智奈は、ストローでグラスの氷をいじりながら、「まず、お父さんに教えないと。最初はあんなに反対してたのに、今じゃ一番かわいがってるから」

「ああ、それ？理由教えてあげようか」

と言って、知亜乃は悪戯っぽく笑うと、「この間、酔いつぶして訊いたんだけどね。ただ「駄目」って言うてみたかったんだって」

智奈は首を傾げて、「何それ？」

「お父さんが言うにはね、拾ってきたら「駄目」って言うのが『ロマン』らしいの」

「…もしかして、理由ってそれだけ？」

「それだけ」

智奈は眉間にシワを寄せて、「…帰ったら『軍法会議』ね」

それを聞いて、知亜乃が楽しそうに笑った。突然、トーフアが頭

を上げて、外を見た。つられて、智奈と知亜乃も視線を外に移した。空が曇り、窓ガラスにポツポツと水滴が当たった。道路が文字通り、水玉模様になっている。

「あら、降ってきたわね」

そう呟いて、知亜乃はカウンターを向いた。

「マスター。傘持ってくるの忘れちゃったの。貸してくれない？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2243d/>

---

雨の降る日に逢いましょう。

2010年10月9日19時36分発行